
スリーピーの話

湯たぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スリーピーの話

【Nコード】

N1857S

【作者名】

湯たぽん

【あらすじ】

フクロウとクマが合体した姿の不思議な種族、オウルベア。彼らは気に入ったモノ全てを持ち去り、自分のモノにしてしまうちょっと困った性質を持っています。

マカは、そんなオウルベア達の中で唯一常識を持つ、心優しいお母さん。

彼女を姉と慕うユタは、とんでもないモノを持ってきました。

オウルベアシリーズ第一弾。「うちの悪かったクマとフクロ

ウのお話」の未来のお話です。

その1

マ力はあきれ返って、自宅の目の前にどんと置かれたそれに見入っていた。

ぽかんと開いたその口は尖っており、ふくろうの嘴のようになっている。耳は頭の上に尖り、ちょうどウサギのようだ。

顔の部分の肌は白いが額から上、首から下は橙色の体毛に覆われている。

そもそも立ち尽くしたその身長が3メートル近いというのだから人間ではない。

まるまるとした身体にかわいいチョッキを着ており、遠くから見ればただの小熊程度にしか見えないだろう。

彼女はオウルベアという種族だった。

「あのね・・・ユタちゃん。なるべく簡潔に言って。」

これは何？なんでこれをわざわざウチに持ってきたの？」

玄関わきの小さなテラスから、椅子に腰掛け頭を抱えたマ力は小さな友人に話しかけた。

・・・小さな友人と言ってもその相手も2メートルは越えていたがこの子が来たおかげで優雅なお昼が台無しだ。前から欲しかった白いテーブルと椅子を手に入れ、上機嫌で紅茶を飲んでいたというのに。

決して嫌いではない。むしろ好んで世話を焼き、一緒によく遊ぶの

だが。

時に誰の手にも余る村一番のいたずらっ子であった。ユタ。彼もオウルベアだった。ただし体毛が緑色である。

彼は褒められたとも思ったのだろうか。顔を上気させてマカ邸のテラスに駆け上がると、くちばしをぐんと突き出し、両手をばたつかせて自慢話を始めた。

「何って？マカも聞いたことあるでしょ。スリーピーだよこれ！ただのおとし話かと思っただけど、本当にいたんだ！

ちよつと散歩に出かけたらすぐその人間の街の外れですやすや寝てたんだよ」

どうやら褒められていようといまいと関係ないらしい。とにかく興奮しきっている。

（・・・ふむ。スイッチの入っちゃったユタちゃんにしては簡潔なしゃべり方ね、一応。）

ユタの飛ばす唾が紅茶に入らなかったか心配しながら、マカは指差された方向に目をやった。

山を越えて持ってきたと、ユタが力説するその物体はマカの綺麗に手入れされた芝生の庭の半分以上を占領し、ゆっくりと胸だけを上下させ、眠っていた。

オウルベアという巨大な種族でも、これは容赦なく巨大だと思う。

（スリーピーね・・・実は私も昔見たことあるんだけど）

マカの記憶にもあった”スリーピー”と、今目の前にあるそれはほぼ同一のもだった。

紅い肌、丸いがところどころ妙に尖った部分のある顔、長い首、ビールっぱらの胴体には羽根までついていた。両手足には鋭い爪が見

えている。

我々人間が言うところのドラゴン、である。

それが寝ている。ユタがすさまじい足音を響かせてこれを持って来た時からずっと、このドラゴンは寝たままである。

呼吸に合わせてゆっくりと胴体を上下し、まるでただの置物であるかのようにそれ以外はまったく動きが無い。

寝ているということ以外この動物を特徴付けるものが何一つ無い。

それがスリーピーの語源らしい。

寧猛にほかの動物を襲うこともせず、生殖活動も億劫なのか個体数も少ない。長い長い一生のほとんどを寝てすごす、非常に珍しい伝説化した生き物である。

これほど巨大な物を近いとはいえ山一つ越えなければならぬ人間の街から運ぶとは・・・

改めてマカはこの若いオウルベアの力と好奇心の強さに圧倒された。

オウルベアは知的生命体であるが、生産活動はあまり行わない。

農業を好んで行うが規模は家庭菜園程度で、食料はほとんど山の木の実や川の魚などであり、そのために一日何百キロという範囲を歩き回り気に入った食料を調達する。

最近では近くに出来た人間の街から、調理された食べ物を気軽に（勝手に）持ってきたりしている。

しかも細々とやっている家庭菜園というのも小麦やブドウ、各種果物。

そのほとんどが酒やお菓子の材料としてしか使われないというからすごい。

根っからの陽気な種族で悩むということが無い。

「そうね、スリーピーね。それについては納得。ありがとうね。で・・・なんでそれをウチに持ってきたの？というか村に持ち込んだの？」

今現在悩みをかかえているマカは、オウルベアの中では変わり者に属する。非常に珍しい常識を持ったオウルベアなのだ。

ただしこの質問に関しては全く正しい答を期待してはいなかった。何せ相手は典型的なオウルベアだからだ。だが聞かずにはおれなかった。

問いかけられたユタは、嬉しさのあまり小さな（？）身体を小刻みに震わせ、丁寧に作り上げたテラスの床を破らんばかりに足を踏み鳴らしている。

「だってスリーピーだよ！すごくない？僕もーびつくりしたよ！」説明は以上。ユタはテラスを駆け下り、スリーピーをあらためて観察しだした。

これはもうダメだ。今度こそマカはぐったりとテーブルに突っ伏した。

これはオウルベア族の特徴である。

とにかく好奇心旺盛、どんなとんでもない代物でも珍しい、面白いの一言で持ってきてしまうのだ。

マカとユタ、彼女らが住んでいるこのオウルベアの集落にある物ほぼ全部が、そのようにしてどこから拾ってきた物だ。

マカのように綺麗に整理された庭や家を持つものは珍しく、岩だらけの庭、拾ってきた犬や猫で埋め尽くされているペット屋敷、

不気味なトーテムポールや人面岩で出来た家など、たいていはろくでもない収集家ばかりなのがオウルベアという種族だ。

彼らに物を集める理由などない。何となく面白いからという理由だけですべてを持ち去ってしまうのだ。

しかも貰う、盗むなどという概念も彼らにはない。（実は常識があるというマカもこの点については普通のオウルベアと一緒にだ）

同じ村の中に住む仲間の家からですら何の断りもなしに物を持ち出し、持ち主もなんらそれをとがめない。

なんとも能天気な、おおらかな種族ではあるのだが、そのせいで近くにある人間の街は酷い目にあっている。

これが何なのかも分からずに、家財道具やオブジェ、果ては電柱まで引っこ抜いて持ち去ったりしているのだ。

料理に毒を混ぜたり、落とし穴を掘ったりして人間側もなんとかものを盗まれないように工夫を凝らしている。

ユタなんかはこのために何度かひどい目に逢ってはいるのだが、この生命力の異常に高い、そして妙に運の良い種族を止める有効な手立てにはなっていないようだ。

「あのね・・・ユタちゃん」

最初にユタに声をかけたのと全く同じセリフである事を自覚しながら、マカは辛抱強くまた口を開いた。

「スリーピーの話は私も知ってる。面白い話だと思うけれど・・・でもあれって、いくら面白そうでも持ってきていい物とそうでない物とがあるっていうお話じゃなかった？」

マカの言う事は事実だ。

オウルベアに伝わる伝説めいたおとぎ話。マカは思い出しながら、口ずさみはじめた。

「珍しい大きな生き物、スリーピーを見つけて、あるオウルベアは喜び勇んで自分の家へ運びました。

とっても美しいスリーピーの姿に、珍しい珍しいとスリーピーを囲んで村のオウルベア達は連日連夜の大騒ぎ。

あまりの騒がしさに起きたスリーピーは怒って、村を焼き尽くしてしまいましたとさ」

これがスリーピーのおとぎ話。

マカの言うとおり、過ぎた好奇心を戒める、能天気なオウルベアにしては珍しく真面目な教訓ものの話である。

「スリーピーはオウルベアの神様が使わしたもので、それを見つけた時は神様が怒っているからで、

あんまり物を持ち運んではいけないっていうしるしなんじゃないかなっただ？」

さらにユタに言い含めるように、マカ。

いくら村一番のわんぱくでも、この話は知っているらしい。それでも好奇心を抑えられずに持ってきてしまったようだ、

ようやくその点に気付き、ユタは居心地悪そうにもじもじして聞いている。

「でもオ・・・だって・・・こんなの見たこと無いし・・・」

それでもやはり好奇心の方が若干勝っているのはさすがユタというところか。

そんなユタに少し微笑みながらマカは考えた。

伝説が本当かどうかは分からないが事実ここにスリーピーがいて、

どう見ても生きている。

いずれ他のオウルベアも聞きつけて騒ぎ出した時、スリーピーが怒らない理由はない。

火を吐くかどうかは分からないがこれほどの体躯と、両手両足の鋭い爪だけでも脅威だろう。

考えながらも恐ろしくなってマカはぶるつと一つ身を震わせた。

村にスリーピーを置いておくわけにはいかない。

ついでに中途半端な諭し方ではこの好奇心の強すぎる少年はけしておさまらないだろう。

（うっ……叱るっていうのは性に合わないんだよね）

マカは意識して厳しい顔をつくり、ユタに嫌われてしまう事も含めて覚悟を決めた。

1時間後には、マカの庭は平穏を取り戻し、淹れなおした紅茶でマカは一息ついていた。

（ま……うまくいったと言えるかな。

やっぱりユタちゃん家の力ボチャ畑が燃やされちゃうっていう脅しは効くわね。あれ美味しいもん）

実際、覚悟したほどに厳しい言葉を浴びせる事はなかった。ユタは

しょんぼりしながらも殊勝にマカの話を読み込んでくれたのだった。

問題のスリーピーは、人間の街に戻すのも危険なので別の山の奥地まで運んでもらい、ユタ自身もその場所へは二度と行かない事を誓わせた。

まるでリストラを宣告されて職場を去っていくサラリーマンのように肩を垂らしてスリーピーを引きずっていくユタを見た時には心が痛んだが

やらなければならない事は素直にやってくれる子だ。

マカは安心して紅茶を飲み干すと、庭の手入れにかかった。

翌日の事である。

まさか、まさかたった一日で自分の努力が泡となるとはマカは予想だにしていなかった。

（イヌか・・・ウサギがいたらいいな。庭に放し飼いに出来そうなのがいたら連れて帰ろう・・・）

南の野原へ出かけようとした矢先、呼び止められた。

その2（前書き）

なんだか即日お気に入りに登録してくれたお方が。ありがとうございます！

ジャンルかタイトルか新着だからか。何に興味が沸いて読んでいただけなのか機会があれば聞いてみたいところですが、ひとまずスリ―ピーの話、その2をどうぞ。

その2

村のと真ん中でスリーピーが寝ているという。

30年ぶりにあの真っ赤で綺麗な鱗を見ることが出来た。これから毎日あれが拝める・・・

と、教えに來た近所の老オウルベアは陶然としている。

「あゝ・・・そうかあ」

この知らせを、例によってテラスでのんびり日なたぼっこしながら聞いたマカは、納得したようにつぶやいた。

「昨日ユタちゃんが山奥へ捨てに行くのを誰かが見てたら当然スリーピー戻ってくるわよねえ」

さすがにマカもオウルベアである。

ユタが言いつけを守らずにこっそり持ち帰ったとかいう考えは全く浮かんでこない。

前向きなのんびり屋といったところであろうか。

特に気落ちすることなく、ペットを探しに行くその足でのんびりとマカはスリーピーを見に行った。

老人に聞いた場所へ行くと、そこには既にユタも来ていた。

確かにスリーピーがその場に居た。見物客が20人ほど、オウルベアをぐるりと囲んでいる。

マカもその輪に加わってまずはスリーピーを確認するように全体を見つめた

が。

「??」

マカも、スリーピーを見上げるほかのオウルベア達も、頭に疑問符

を浮かべていた。何か違和感がある。昨日と違う。

「あゝ、うん。息してないんだよこいつ。胸が上下しないんだ」
事情を知っているらしい中年のオウルベアが話しかけてきた。たしかロクロウという名前だったか。

あまり馴染みのない村人の指摘を受け、マカは改めて観察してみた。同じように、輪をなしていた20人ほどのオウルベア達が、ロクロウの周りに自然と集まり同じように視線を巡らせ始めた。

たしかに、昨日見たままの姿のスリーピーだ・・・が、動きがまったく無い。

ゆっくり上下していた胸が今は固まっている。

肌の色や血色は変わっていない気がするけれども・・・？

「死んでるの？」

今度はユタが無邪気に緑の毛に覆われた手をあげて質問した。

マカも同じことを聞きたかった。

胸が上下していない。すなわち呼吸してないというのに、このドラゴン は血色が良すぎる。胸の動き以外昨日と全く同じ姿に見える。死んでいるとはとうてい思えなかった。

どちらにせよドラゴンという、獰猛な獣のイメージはなくなったため、見物客はさらに輪を縮め、ただのオブジェと化したスリーピーを調べ始めた。

ユタをはじめ子供達は大胆にもスリーピーの胸のあたりをばんばん叩いたりしている。

止めようかどうか迷い、はらはらしながらマカは助けを求めるように先ほどのオウルベア、ロクロウに目を向けた。

ロクロウは待つてましたとばかりににやりと笑って答えた。

「死んでいる？ふむ・・・そうだとも言えるし、そうじゃないとも言えるんだなこれが」

その言葉にスリーピーをいじるのをやめ、皆が疑問符を浮かべる中、スリーピーの腹の下をまさぐりだす。

そのしぐさをばーっと見つめていると、再びロクロウはにやりと笑った。

「あつた、ここだよく見てろよ・・・よつと！」

掛け声と同時に、スリーピーの腹の一部の皮膚が強く引つ張られた。

「！！ええ！？」

当然、伸びるとおもわれた皮膚は、そのまま手前にスライドした。どう見ても生き物だったスリーピーの腹の中に、無機質な長方形の空間が見られ、中にはバネのようなものであった。

「これは、え何？スリーピーじゃないの？生きてるよね？いやでも生きてないの？」

すっかり混乱して、マカは口をぱくぱくさせるようにして要領の得ない質問を繰り返した。

集まってきていたオウルベア達も一樣に取り乱して、目を白黒させている。

そんな群集をこれまたにやにやしながら眺めて

ロクロウはもったいぶるようにチョッキのポケットに手を入れた。

40個の目玉がまん丸に開かれ注目するなか、ゆっくりと取り出されたのはこぶし大の円筒形のものだった。

「その窪みにこいつが入ってたんだ。2個な。どーもこれがスリーピー……かどうか分からないがコイツ、の胸を動かしていたらしい。」

こいつを抜いたら動かなくなった」

ロクロウが出したのは電池であつた。

彼らの村には、人間の街から持ち出してきたラジオや懐中電灯、時計などがあるが、実はそのほとんどが機能していない。

それがどんな機能があるかなどという事は全く気にせず、単なる飾り物として持つてくるからだ。

電池交換なんてするわけもない。

機械をいじくりまわしてその中身を見るなんて事をしないオウルベア達。

当然ロクロウが出した電池もそれが何なのか分からず、マカ含めてその場にいた全員が珍しそうに円筒形の物体を見つめた。

「スリーピーを隅から隅までなでくりまわして、こいつを見つけたのがあのカリンでな。」

カリンにはこれが何なのかすぐにピンときたらしい」

自分と同じオレンジ色をした、若いオウルベアを思い出しながらマカは話の続きを促した。

「この広場へスリーピーを運んできたのカリンだったんだがな。」

カリンはどうやら別のやつがスリーピーを運んでるのを見て追っかけて、別の場所に置いたのを村へ運び込んだらしい。

あいつがどこでスリーピーを見つけたか分かるか？」

「！人間の街だ」

思わずユタとマカが同時に叫んだ。

群集に食い入るように見つめられ、演説するかのように気分よさそ

うに話していたロクロウは

話の腰を折られたように思ったのだろう、若干顔が不機嫌になった。

「・・・ああ、そう。人間の街の近くで見つけたらしい」

今度は見物客の目がマカの方を向いた。どうやらこっちの方が詳しい話をしてくれそうだ。好奇の目がそう語っている。

群集の輪が次第に自分を中心にしはじめたのを感じ、マカはあわてて違う違うと手を振った。

「カリンは！あいつは人間についてやたら詳しくたからな。そこでこれ、電池って言うらしいが、人間の道具らしい。カリンはこれを知ってたんだろう」

ロクロウが主導権を取り戻そうと必死になって声を大きくした。

見物客の目がロクロウに戻ったのを見て、マカがほっと息をついていると

ロクロウはまたしても気分よさげに言葉をつなげた。

ユタは目立ちたかつたらしく、不満たらたらな顔でマカをちよつとにらんでから、口を挟んだ。

「カリンの前に街でスリーピー見つけたの僕だよ」

どうやらユタはロクロウと顔見知りらしい。お前だったのか、と親しさをこめてロクロウが言う。

注目を自分ひとりに集めたいのだろう、ユタはスリーピーの前に立ちほだかりしゃべりだした。ただし自分も意味が分かっていないので話す相手は事情を知るロクロウだが。

「スリーピーは危険を知らせる神様の使いだから、遠くの山まで運んで置いてきたんだ。」

それをカリンが見てて村まで運んじやっただろうけど・・・
神様の使いが何で人間の道具で動いているの？」

またしても待つてましたとばかりにロクロウが得意げに口を開く。

「要はこのスリーピー、人間が作った二セモノって事さ。

どーやらどつかでオウルベアのおとぎ話を聞きつけた街の人間が
作ったんだろ。

おとぎ話本来の意味ではスリーピーが見つかったらしばらく物を
集めて回るのを控えなきゃいけないんだもんな。

物を持っていかれるのを嫌がる人間のやりそうな事さ。ユタは一
番人間の街によく行つてたからな。

まんまと人間の仕掛けた罠に引かかった・・・わけでもないか。
喜んで持つて帰つてきちゃうんだもんな

ま、騙されたには違いないんだがな」

冷笑しながらも、何故か自嘲気味にロクロウ。矢張り自分がユタの
立場でも同じことをするんだろうなとも思つたのだらう。

「騙されたのか・・・。人間が、スリーピーを作ったのか・・・」
ユタがぶつぶつ言いながら、またスリーピーに近づいてぺたぺた触
りだした。

他の見物客のほとんどは白けたように巨大な赤いオブジェから遠ざ
かっていき、興味深げに見ているのはユタだけになった。

残った者たちもデンチなる物に視点を換え、ロクロウの手の中をし
げしげと見つめている。

マカはどっちに加わろうか一瞬迷つたが、少し異様な雰囲気を出し
ているユタが気になり、そちらに近づいた。

「ユタちゃん・・・残念だったね？ホンモノのスリーピーじゃな

くて」

しかし声をかけられたユタはスリーピーの皮膚をつつきながらずつとぶつぶつ何かをつぶやいている。

周りのオウルベア達のスリーピーの尻尾を引つ張ったりまぶたをこじ開けたりしているのも目に入らず、マカが存在にも気がついていないのかもしれない。

「・・・ユタちゃん？何考えてるの？」

またしてもマカには答えず、今度はユタは自分の顔とスリーピーの顔を手でぺたぺたと触って比べ始めた。

「・・・作り物・・・なのに生き物の手触り・・・全部作ったのか・・・それとも・・・四角い箱で・・・」

どうやらこの偽者のスリーピーがどうやって作られたのが気になるらしい。ユタらしい好奇心だ。

（あらら。スイッチ入っちゃったよユタちゃん。）

こうなると誰にも止められない。自分が全て納得するまでスリーピーをいじり倒すだろう。

マカはただ呆然とユタの調べが終わるのを見ていた。

あまりの集中力に、マカが声をかけられずにいるうちにまわりには誰もいなくなり

ユタがようやく動いたのは太陽が頭上をとくに過ぎたころだった。

「あ、ユタちゃん？もう帰る？もし午後暇だったら・・・」

ユタは突然がばと身を起こし、マカが言葉をかける間もなく一目散に走り去っていった。

オウルベアとしては小型ではあるが、2メートルの巨体が全力で走り去っていくのだ。

すさまじい足音をたてながら、しかし異常なまでのスピードでユタの姿は見えなくなってしまった。

「一緒に・・・犬でも・・・探しに・・・・・・ハア」

予想していた事ではあるけども。

「あの方向は人間の街の方ね・・・。あゝあ、スイッチ入っちゃったユタちゃんが相手だと大変だぞー、人間達。

変なことにならなきゃいいけど・・・」

人間の街へ行くには山をひとつ越えなければならないが、彼の足ならあつという間だろう。

多少嫌な予感を覚えつつ、マカはしばらくの間立ち尽くし、ぼんやりとユタの走り去っていった方向を見つめていた。

その3 1年後

その日、マカは朝から四苦八苦していた。

何をどうすれば良いかわからない。でもはやくしないと・・・

ダダダダダダダダダダダダ

ああ、またあの足音だ。

また一回り大きくなり、足音も重くなってきたユタが全速力でマカの家の扉に突進してくる。

「マカ何やってるの？はやく返事してよ」

身体は大きくなったけど、中身は1年前のあの日とまったく変わってないなあ。

そんなことを思いながら、マカは自分の手の中にある小さな箱のような物を適当にいじっていた。

そもそも携帯電話とか言われても。

電話なんてものさえ使ったことないのに、いきなりそれに携帯とかいう言葉がついたって分かるわけないじゃない。

さらにメールだとかカメラだとか。なんでこの子はこんなの使えるのかしら。

1年前のあの日。お目当ての犬を連れて帰り一緒に戯れてるマカの家に戻ってきたユタは、なんと顔が人間になっていた。マカはわけが分からず恐慌に陥ったが、これはいわゆる「特殊メイク」というやつだった。

どうやら本物と見間違えるほどのスリーピーを作った人間の業に興味を持ったらしい。

アンテナもケーブルもないのにTVを拾ってきて、単なる飾り物として置いて満足するようなオウルベアだが

ユタは偽スリーピーを見て、機械をスリーピーの姿に変える事が出来るなら自分の顔や皮膚も自由自在に変えることができると思ったのだそう。

耳や毛の色、形にとっても気を使うオウルベアには放っておけない技術だったのだろう。

あの日以来、ユタは足しげく人間の街に通った。

最初こそ2メートルを超える巨体での脅しのようなものであったらしいが

ユタ自慢のかぼちゃ畑の実りを持っていったところ喜んで色々教えてくれるようになった。

それまで使い方にはあまり興味のなかったTVや蛍光灯、はてはその動力のためにソーラー発電機までユタは村に持ち込み

今までオウルベアを害獣としか見ていなかった人間も、ユタのかぼちゃやマカの果物にすっかり参ってしまったようで、両者は頻繁に交流することとなった。

しかしマカは不満だった。

新しいものばかりがどんどん増えていくばかりでろくに使い方を覚える間もない。

あれ以来何故かますます自分になつくようになったユタに振り回されながら、今は携帯電話のメールを必死になつて覚えているところ

だ。

（はあ、私は前のままでも十分良かったんだけどなあ・・・）
目の前でここにこしながらマカからの返信を待つユタに見つめられ、マカは携帯の画面とにらめっこせざるをえなくなった。

「カリンから聞いたんだけど、今はビスタってのが最先端らしいよ。なんかやたら重いらしいけど僕に運べるかな？」

DSってのも面白いらしいんだけど、どっちがいいと思う？」

（あゝユタちゃんのかぼちゃケーキ食べたい）

人間への贈り物のため、すっかり食べれなくなった極上のかぼちゃケーキを思い出しながら、マカはぼろっとユタのとりとめのない話に耳を傾けていた

おしまい。

その3 1年後（後書き）

スリーピーの話、これにて完結です。

このオウルベアシリーズ、バルビレッジというコミュニティゲームを基に書いているので、スリーピードラゴンも実際に居ます。

ゲーム中では時折まばたきしていますがお話中では寝っぱなし。まあニセモノですからね。

あーニセモノかあ、と落胆するどころか
凄いニセモノ！とテンション上がって人間に突撃していくようなユ
タ。

書いてて楽しいキャラが出来上がりました。

このシリーズ、まだまだ続きますよー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1857s/>

スリーピーの話

2011年7月7日06時11分発行